

リレーエッセイ「橋本道夫先生と私」(第5回)

橋本道夫先生の間人像 — 静謐な怒りの精神 —



(一社)海外環境協力センター 研究顧問 片山 徹

昭和30年代に入って日本列島は大異変に見舞われた。エネルギー転換、所得倍増政策によって始まった重化学工業化の進展、モータリゼーション等によって大気汚染、水質汚濁等の公害問題が激化しました。開発行為なかでも河川や海岸の改変、森林の消滅等によって日本の野生生物は急速に減少した。自然と人と生き物が織りなす土地状の日本列島に深刻な危機が迫りだした。

昭和40年、私は京都大学で衛生工学を学び厚生省(現厚生労働省)に入った。配属先は環境衛生局公害課、呱呱の声を上げて2年目の草創期にあった。課員数は10名程度、そこを仕切る人こそ初代の公害課長の橋本さんだった。日本のみならず「ドクターハシモト」として世界の環境政策にも大きな貢献をされた橋本さんの本格的なスタートはこの小さな公害課から始まった。

当時から英語が達者で、学者肌の大変な勉強家だった。公害問題の動きや政策形成についての私論を次々と発表をされ、学会等で啓発的な講演をよくされていた。国内の各方面の企業人、地方自治体・大学関係者・患者団体、マスコミ各社、そして海外からも行政官や研究者が頻繁に公害課に見えた。それらの人達の話にじっくり耳を傾けながら、誰彼なしに分け隔てなく説得口調で暖かく対応される。公害課の入り口には、公害に関する数多の調査報告書や橋本さん自ら執筆された数々の報文等を配布するコーナが設けられていた。情報公開を積極的に行うこと、橋本さんの核心的な戦略だった。

毎朝、課員よりも早く出勤され、英文タイプライターでカードを作成される。通勤時に読まれた新聞情報等の英文化だったのだろう。地方の環境汚染に関するデータや国際的な情報等は全部カードに集積されている。人と対応される時は何枚かのカードを事前に用意され、それらを自由自在に駆使されながらお話になる。橋本さんのカードシステムは、後年、梅棹忠夫のベストセラー「知的生産の技術」(岩波新書、昭和44年)の中で業務遂行上の実践的技術として紹介されたものだった。橋本さんはこのカード利

用を先んじて自家薬籠中のものとされ仕事の武器とされていた。先見の明があったというべきか。

書類を風呂敷に包んで外出される時は夕方まで戻ってこられない。公害対策基本法や公害防止事業団法の制定等のために精力的に各省折衝や国会対応のために出掛けられたのだった。課員も自動車排ガス調査、新産・工特地域の開発事前調査等関係省庁や関係府県、研究者との打合せで多忙であった。新設された公害課は、毎日が戦場の様相を呈していた。新米の私はそのような高揚感と氣勢の満ちた雰囲気の中で右往左往していた。

八面六臂の活躍で日本の公害問題に真正面に立ち向かわれた橋本さん。コンピュータつきのブルドーザだった。

橋本さんのお家にお邪魔をしたことがある。三鷹にある簡素ともいえるべき木造の公務員住宅に住んでおられた。鉄網造りの立派な檻に精悍な犬を飼われていた。動物好きの橋本さんは多忙な日々の中でも毎日の愛犬の散歩は欠かさなかった。愛犬とのひと時の散歩が心の休まる時だったに違いない。

「ぼくは、本当は獣医になりたかったのですよ」愛情のまなざしを愛犬に注ぎ、笑みを湛えながら意外なことをいわれたときの表情を今も忘れることができない。

橋本さんは公害行政に携われて10年目に「公害を考える」(日経新書、昭和45年)を著し世の中に問われた。本書は洛陽の紙価を高め増刷を重ねた。まえがきの一部にはこのようにある。

<冷静に考えるならば、公害は決して生やさしい問題ではない。複雑で巨大でしかも恐るべきポテンシャルをもった怪物である。この怪物は人間社会の外からやってきたものではなく、われわれ自身が社会の中に生み出した怪物である。その意味で、公害に対する戦いは人間社会における内戦のようなものである。それゆえに市民、行政機関、企業の三者が協力して、あらゆる方法を講じて取り組まねばならない性質のものである。問題提起と怒りはいまや世にみちあふれている。問題解決を多角的な見地か

らどのように進めるかが今後の最も重要な課題であろう。

このメッセージは、行政官として橋本さんが公害問題の本質について深い思索を重ねられ、職務を遂行する上での強い意志と義務感、そして覚悟を吐露されたもの以外の何物でもない。橋本さんは医学を志され、公衆衛生の現場としての保健所が出発だった。その間にハーバード大学公衆衛生学部を卒業されたが、その過程で国際的な環境の中で修業を積み知識と技術にさらに磨きをかけられた。医師は医学の習得中に生命の神秘に触れ、生命に対する尊厳と敬虔の念を深め、治療や公衆衛生活動を行う中で常時厳しい科学的判断に迫られる職業である、と思う。医師として必要な精神、信念、矜持がそのような体験の中で醸成されていくものだと想像するに難くない。橋本さんは行政官として群をぬいた高い使命感とともに人を圧する気迫を有しておられたが、それは医師的精神の高揚から生まれてきたものに違いない。

ここにきてもはや橋本さんの人間像について語ることは難しい。しかしかつて私はもしかしたら橋本さんの分身かと思ひながら、共感を覚えた文学者の作品に出合ったことがある。医師でありながら作家としてよく知られた三人の作品だ。三人につらぬく共通項は何か、それは怒りの精神である。橋本さんの人間像がそれらの作品を通して見えてくる。

一人はハンス・カロッサである。カロッサの小説に「ルーマニア日記」がある。主人公カロッサの行動から橋本さんの分身が浮かび上がってくる。カロッサはドイツの内科開業医として長い地域活動をした作家だが、第一次世界大戦が勃発した時に軍医として従軍した。戦闘が激しい場面でドイツの同盟国ハンガリーの将校がカロッサに潜望鏡をのぞかせる。カロッサの視野に塹壕を掘っている敵のルーマニアの兵士を発見する。しかしカロッサは敵兵の発見について将校に告げない。そのため敵兵は殺されずすんだ。カロッサは相手を殺す立場にありながらそれを拒否したのだ。

社会が生み出した恐ろしい怪物としての公害に対する世の中の怒り、それに抗しての戦いには敵もなければ味方もないという橋本さんのメッセージ。公害調査についていえばどこの省庁もない、やれる能力のある省庁がやればよい、それが公害に対して向かう橋本さんの態度であった。私は橋本さんの姿勢に戦乱のさなかにあつてカロッサの取った行動と同質のものを感じる。戦争という不条理を前にした医師カロッサの静謐な怒りの精神に橋本さんのそれを見る。

もう一人の作家はチエーホフ、創作を行いながら医師としての活動をし続けたロシアの作家である。1890年、30才の時に馬車で単身シベリアを横断して苦労を重ねサハリン島まで大旅行をした。この旅行の目的はサハリン島での流刑制度の医学的な観点からの調査報告書の作成であった。その時の記録が大作「サハリン島」として誕生した。囚人の虐待、鞭刑の残酷さ、便所の劣悪さ、飢えと極寒等、サハリンに見た衛生状態や地獄の状況を告発したチエーホフ渾身の怒りの書でもある。チエーホフは囚人ひとりひとりに面接して調査記録を作成しているが、記録の手段としてパンチカードを駆使した。毎日、タイプライターを用いてカードの中へ重要な情報を入力されていた橋本さん、その姿はチエーホフと重なって見えてくる。橋本さんは若い頃、大阪府豊中保健所管内を歩き回りながら地域に密着した公衆衛生活動に精励されていた。公害問題に取り組みられるようになってからは四日市、水俣、阿賀野川、神通川等日本の公害発生地に足を伸ばされた。それぞれの現場に立たれた橋本さんには、対比のできない問題状況の差はあったにせよチエーホフと変わらない怒りの心で一杯だったはずだ。「神は現場に宿る」とはよく聞く言葉である。橋本さんは現場に立たれる度に、現場の天啓に触れられていたのだ、そうに違いないと思う。

三人目の作家は森鷗外である。医学者、文学者であった鷗外は行政官として35年間陸軍省に籍を置き、陸軍省医務局長にまで上りつめた。「芸術の認める価値は、因習を破る処にある。因習の圏内にうろついている作は平凡である。因習の目で芸術を見れば、あらゆる芸術が危険に見える」(沈黙の塔、明治43年)と喝破した。この檄ともいべき文意からは危険でないような文芸は平凡だという怒り、そして現状打破の精神が強く伝わってくる。鷗外の文学は「憤怒の文学」といわれるが、体制内反体制の気性を鮮明に貫いた作家であった。現状の打開に心身を傾注された橋本さん。鷗外の姿勢や作品からも橋本さんの分身が見えてくる。

橋本さんの職務デスクのガラスマットの上にはいつも肺の病理組織の薄層標本が置かれていた。当時、四日市、横浜市、川崎市、大阪市等々それぞれの地域では大気汚染による悲惨な病人や死者が多発していた。薄層標本は大気汚染による死者の肺から作製されたものであった。橋本さんの静謐ではあるが怒りの精神を燃焼させ続けたこれに過ぎる黙示録はない。

21世紀に入って人類は地球という次元の中で恐ろしい気象変動によって翻弄されている。怒りの精神を弛緩させてはならない。